

卷 頭 言 —— 木簡保存法の思い出 ——

昭和三十六年一月末の木簡発見のいきさつは創刊号の田中琢氏の文章で明らかであるが、その当時この貴重な出土品をどのように保存し処理すればよいかは全く五里霧中といってもよかった。

木簡にかぎらず出土木製品は発掘してそのままにしておくとは収縮しあるいはささくれだって、あげくのはは分解して形がなくなってしまうことは経験上周知のことであり、昭和十一・二年の唐古遺跡発掘の木製容器をはじめとする莫大な農具が京大考古学教室の水槽の中で劣化するのを見守ってきたものにとって大変なことであった。また飛鳥寺塔跡で建久の舍利外容器の保存処理の際、東京国立文化財研究所の人から、登呂の木製品の処理をしたが処理後の収縮は数%で、木製品が土中で水分を吸って膨張してたのが元にもどったのでしようといわれ、土庄の中でどうして膨張出来るのですか、それは処理上の問題でしようかと反論したばかりであったので、大変困り防腐材としてフォルマリンを用いゼラチン膜に封じ込め、冷暗所に置くのがよいと考え、当時平城宮跡の発掘事務所にはなかった文明の利器電気冷蔵庫で保管することとした。しかし、出土例が増えるにつれこれではどうにもならないことが明らかになった。

昭和四十二年秋歴史博物館の参考資料蒐集のためヨーロッパ出張を命ぜられ、デンマーク国立博物館の保存科学ラボラトリ

―でボロルセン・クリステンセン氏から同氏の開発した凍結乾燥法を教えられ、木簡の処理法はこれだと大変嬉しく思った。帰朝後早速文化庁の外人学者招致を御願いし、昭和四十五年三月にクリステンセン氏を迎えることが出来た。氏には奈良国立文化財研究所で保存科学を担当する沢田正昭君に懇切に教示していただいた。さらに四十九年沢田君がデンマークに四ヶ月間留学して木製品処理の技法をマスターし、今日の木簡処理法を軌道にのせてくれた。

その後何かと処理法の改善がおこなわれ、今日では安心して保存管理ができるようになったが、当時を思い出すと全く泥縄で、初期の出土品がよく今日までもったものだと思ひである。

(坪井清足)